

小学校における国際理解教育 —教員志望の大学院生と留学生の協働による授業づくり—

は せ がわ ユリ*・かた やま もと ひろ 元裕**・ばく そん ひ 聖希***・やま もと あや こ****・よし みつ 吉光 淳**

*グローバルセンター・**修士課程社会科教育専攻・***修士課程学校教育専攻(修了)

****修士課程英語教育専攻

(平成30年7月31日 受付)

本論文では、小学校6年生の2クラスの児童を対象として実施した国際理解教育の授業について考察する。この活動の最大の特徴は、教員志望の大学院生と留学生が協働で授業づくりを行い、1回限りの交流会ではなく、1年間を通じて計7回の授業を実施したことである。この授業の目標は児童が世界を身近に感じ、視野を広げるために、様々な国の文化・伝統・習慣などを体験的に知ること、グローバルな視点を持つとする態度を養うことである。それぞれの授業では、食事、言葉、音楽、遊びなどのテーマを設定し、留学生が母国の習慣や文化の紹介をすることによって、児童に講師である留学生と直接触れ合いながら体験してもらった。成果としては、長期的に実施したことで、児童たちが少しずつ異文化に触れる戸惑いをなくし、積極的に講師の留学生に質問するようになったこと、毎回紹介される国について新たな発見をしていったことが挙げられる。

キーワード：小学校、国際理解教育、留学生、協働、授業づくり

I はじめに

大阪教育大学では、10数年にわたり地域の小学校からの要請を受けて留学生を派遣する活動を行っているが、授業の一環として計画的に実施される事例は少なく、一回限りの「特別授業」としての位置づけが多い。最近では英語母語話者の留学生を派遣してほしいという依頼が増加しており、外国語に親しむ活動が中心となる傾向も見られる。また、留学生センター(現グローバルセンター)で2005年度から2007年度まで実施した「バイリンガルサポート」では、日本人学生と留学生が協力して日本語が十分に理解できない児童・生徒への学習支援を行ったことがあるが、国際理解教育の授業への協力では、話の内容について派遣先の学校や日本人のチューターに相談することはあるものの、多くの場合は留学生自身が単独で自分の国について何を紹介するか考え、授業に臨んでいる。

今回実施した国際理解教育は、教員志望の大学院生(以下、「大学院生」とする)が中心となって企画し、留学生と協力して授業を作り上げていったこと、1年間に複数回、継続的に実施したことが、これまでの活動との大きな違いである。この活動は本学の平成28年度学生プロデュースとして採択された企画「小学生の体験的な国際交流と国際理解の授業」を、柏原市内の公立小学校の全面的な協力を得て実施したものである。本稿では、授業の目標、それぞれの授業内容、授業づくりの過程について紹介し、授業の具体事例として第2回のインドネシアの留学生との授業を取り上げ詳しく述べるとともに、毎回児童に記入してもらった「振り返りシート」をもとに、その効果について考察する。

Ⅱ 小学校における留学生との交流を通じた国際理解教育の概観

文部科学省は「初等中等教育における国際教育推進検討会報告書～国際社会を生きる人材を育成するために～」(2005)で、国際教育の具体的な方策として、教員養成段階における取組の充実、直接的な異文化体験の重視をあげ、外部の人材や組織と学校が連携し、地域と協働することが求められるとしている。しかし、小学校における国際理解教育は独自のカリキュラムがなく、一部の教師がそれぞれの教科に結びつけて実施することが多く、社会科、総合的な学習、外国語活動に含まれることが多い(桐谷2015)。また、2011年度より小学校において外国語活動が導入され、2020年度には英語教育が本格的に実施されるのに向けて、外国語教育と結びつけた国際理解教育も導入されている。

留学生を活用した国際理解教育としては、大石(2014)、伊藤(2016)などに各大学における取組が紹介されている。大阪教育大学でも、小学校に留学生を講師として派遣した活動の記録が留学生指導センター(現グローバルセンター)年報に記録されており、2002年度にはその数が10件にのぼった。この年に実施が本格化された「総合的な学習」で国際理解教育が課題となったことに影響を受けたと考えられる。地域の学校への留学生の派遣はその後も継続されたが、2014年度には、本学で実施した「国際交流週間」に合わせ、地元の小学校4年生の児童78人を大学に招き、留学生が出身地の文化、ことば、遊びなどを紹介するというイベントも行った。子どもたちからは「外国について知ることができて楽しかった」という感想が寄せられた一方で、学外でのイベントへの参加については、時間的制約や安全性の問題などから、継続するのは難しいという声があり、これ以降は実施されていない。

留学生が講師となる取組は、このようにさまざまな形で実施されているが、一回限りのものが多く、イベントとしての価値はあるものの、小学校での教育活動としての位置づけはあいまいである。加藤他(2009)は「アジアシリーズ」として年間を通して継続的に実施した事例であり、大学教員が関わる「教育プログラム」として提供されているのが特徴である。

Ⅲ 授業の目標と活動内容

1. 授業観

世界のグローバル化が進み、さまざまな分野で日本と世界がより密接に関わる機会が増えてきた。将来児童が外国と関わる機会、世界で活躍する機会はますます増えていくと予想される。一方で、児童が外国人と交流したり、外国と関わったりする機会は多くない。そこで、小学校教育の段階から多くの外国人とコミュニケーションを取ったり、異国の文化、伝統、習慣を見聞したりすることは、国際人の育成に貢献する活動になると考えた。

本活動は、文部科学省の「初等中等教育における国際教育推進検討会報告書～国際社会を生きる人材を育成するために～」(2005)に「国際教育を推進する基本的視点」としてあげられている「国際教育の実践力の向上と『学びの広がり・深まり』をもたらし授業づくり」と「幅広い経験や優れた知識を有する組織や人材など国際教育にかかわる資源を活用する」ことを目指し、留学生との交流の中から体験的に学び、世界に視野を向ける態度を養うことを目的に設定したものである。

最も大切にしたいことは、児童が実際に留学生と交流し、外国を知り、触れることで、世界と自分が近い存在であることを体験的に学習していくことである。また、異文化を尊重する姿勢を養うとともに、異文化との出会いをきっかけとして自文化について改めて考える機会とすることを目指した。林原他(2010)では、1回か2回の留学生との交流で児童の意識の変化が確認されているが、今回の長期間の定期的な交流は、児童の世界に対する意識変化において効果的であったと考えられる。

2. 授業の目標

本活動では小学生児童に対し「様々な国の文化・伝統・習慣などを体験的に知ることを通して、グローバルな視点を持つとする態度を養う」という課題を持ち、単なる交流会ではなく、交流や異文化紹介を行うことにより、世界を身近に感じ、視野を広げることを目標とした。また、自文化を見直す機会やコミュニケーション

ン能力を伸ばす機会であることも意識した。

具体的には、以下の4つの目標を立て授業を行った。

- ①留学生の話を聞いたり、直接交流・体験したりすることで、外国や外国人を身近に感じると同時に、世界に視野を向ける態度を養う。
- ②外国の生活や文化を見聞きたり体験したりすることで、自国との違いや共通点を知る。
- ③異なる文化・伝統・習慣を知り、異文化を理解すること、尊重することの大切さを知る。
- ④体験したことや感想を言語により表現することで、理解・知識・考えを深める。

3. 活動内容

上述した目標のもとに、柏原市内の公立小学校において、6年生計56名（2クラス）を対象に、総合の時間を利用して計7回の国際理解教育の授業を行った。以下に、授業を担当した留学生の出身国、各授業のテーマ、特徴等を記載する。

①タイ・インドの留学生

「食事」をテーマに授業を行った。まずはインドとタイについて地図や写真を示しながら紹介し、次にアクティビティとして、タイとインドの食事の食べ方を児童と実践した。食事の食べ方や食事作法、食文化の違いを知る一方で、食べ物に感謝する気持ちはどの国も同じであるということに気づかせることができた。

②インドネシアの留学生（2人）

「言葉」をテーマに授業を行った。まずはインドネシアについて地図や写真を示しながら紹介し、アクティビティとして、インドネシア版じゃんけんを紹介し、インドネシアの「さよなら」の歌を歌った。インドネシアにも日本と同様にじゃんけんがあるが、日本の「グーチョキパー」とは違って「人、象、蟻」を使うこと、また、遠いインドネシアでも日本語が使われた歌があることに児童は驚いていた。さらに、2人の留学生の衣装の違いから、同じ国でも多様な価値感があることを伝えることができた。

③ブラジル・ペルーの留学生

「音楽」をテーマに授業を行い、クラスを二つに分けてブラジルとペルーについて交互に交代で紹介した。ブラジルについては、地図や写真で紹介した後、アクティビティとして、手作りの羽の飾りを頭にかぶってブラジルの「サンバ」をみんなで踊った。ペルーについては、地図や写真で紹介した後、留学生がペルーの楽器を演奏し、「コンドルは飛んでいく」を児童とともにリコーダーや鍵盤ハーモニカで合奏した。ブラジルにも日本の祭りのようなフェスティバルがあること、ペルーでも日本と同じようにリコーダーを習うことなどを知り、遠い国であってもたくさんの共通点があることに気づかせることができた。

④韓国の留学生（2人）

「遊び」をテーマに授業を行った。まずは韓国や韓国の小学校について地図や写真で紹介した後、アクティビティとして、3つのグループに分かれて韓国の伝統的な遊びを紹介した。日本の「だるまさんがころんだ」と同じルール「ムグンファコッチピヨッスムニダ」や、日本の「ケンケンパ」に似た「タンタモッキ」、日本の「お手玉」に似た「コンギ」を児童と一緒に実践し、体験的に韓国の遊びに触れさせることができた。韓国の小学校との共通点や相違点、韓国の伝統的な遊びには、日本と似ている点も多いことなどに気づかせることができた。

⑤中国の留学生（3人）

小学校の先生が事前に用意した質問について、児童が予想を立て、留学生が答えを伝える、という形で授業を行い、中国の小学校、中国の流行りや休みの日の過ごし方、お正月、街の様子や伝統衣装について紹介した。中国の小学校では目の体操の時間があることや、中国では日本のキャラクターが流行っていること、中国は旧正月を祝い、日本と同様にお年玉をもらうことなどを知り、日本との共通点や相違点に気づかせることができた。

⑥バングラデッシュ・ベトナムの留学生

「お正月」をテーマに授業を行った。まずはバングラデッシュとベトナムについて地図や写真で紹介し、それぞれのお正月の特徴を伝えた。次にアクティビティとして2つのグループに分かれ、お正月の飾りを作った。バングラデッシュはベンガル語で「お正月」と書いた飾り物を、ベトナムは梅の花の飾り物を作った。日本、バングラデッシュ、ベトナムは3カ国ともお正月を祝うが、それぞれお正月の日が異なること、お正月の飾りを飾る点では3カ国とも共通していることを知り、「お正月」という一つの行事を通して3カ国の共通点や相違点に気づかせることができた。

⑦まとめ（大学院生が担当）

これまでの6回の授業のまとめとして、大学院生が授業を行った。まずはこれまでの6回の授業について、世界地図と写真を提示しながら振り返った。本時の活動としては、異文化接触場面で経験しうるエピソード（留学生が食事会に遅刻するエピソード、食べ残しをするエピソード）を児童に提示し、「もしその場にいたらどう思うか」グループで考えさせた。その後、留学生の立場からの遅刻や食べ残しの意味（ホストを急がせないため、食べ残すことが礼儀とされることがあるため）を紹介し、「もしその事情を知っていたらどう思ったか」再びグループで考えさせた。留学生による6回の授業と大学院生によるまとめの授業を通して、国際交流をする際には、自分の国と相手の国の文化の違いを想像すること、自分の国の「当たり前」で評価するのではなく、多様な文化や価値感を尊重することを児童は学ぶことができたと考えられる。最後に、今後中学校に進学し、国際交流場面に限らず、多様な出会いを持つようになる児童に向けて大学院生からメッセージを送り、1年間の授業を終えた。

4. 授業づくりの過程

この節では授業づくりの過程について示していきたい。授業当日に至るまで、大学院生と留学生が協力して授業づくりを行った。まず、学内の国際センター（現グローバルセンター）教員に日本の教育や学校に興味のある留学生の選抜を依頼した。その際には以下の3点を考慮した。1点目は児童が年間を通して様々な国の人と出会うことのできる機会を作るために、毎回異なる国からの留学生を選出するという点である。一度の授業につき、一カ国から2人、もしくは異なる2つの国から1人ずつ来てもらい、それらの国と日本を比較してそれぞれの国の特徴に気づいたり、それぞれの国が日本と共通点があることに気づいたりできるようにするためである。2点目は、第2回目、第5回目のように同じ国から数人の留学生に来てもらうという点である。そのねらいとしては、日本もそうであるように、同じ国でも地域によって文化や習慣が異なるということに気づかせることであった。3点目は小学校の校長先生や担任の先生と話し合い、助言を受けながら国を決めていったことである。小学校側より、児童の日頃の様子から、韓国や中国に関する様々な報道の影響を受け、児童が韓国や中国について否定的なイメージを少なからず持っていることが感じられるため、韓国、中国の留学生には是非来てもらいたいという希望があり、第4回目は韓国、第5回目は中国からの留学生に依頼することとなった。

留学生を選出した後は、大学院生と留学生がミーティングを約3回行う。1回目のミーティングでは、プロジェクトの趣旨を説明し、授業全体のテーマやアクティビティの内容を決める。その際には日本との相違点や共通点をもつテーマを留学生と話し合いながら決めた。留学生には2回目のミーティングまでに5分程度の国の紹介のプレゼンテーションを作ってきてもらい、大学院生はアクティビティに必要な教材や道具を用意した。2回目のミーティングでは、まず国紹介のプレゼンテーションの内容や時間配分、小学生への伝え方等を一緒に確認した。その後、アクティビティの内容を共有し、アクティビティのために教材づくりが必要な場合は、留学生に教わりながら一緒に作成し、授業の流れの確認をした。3回目のミーティングでは、授業の最初から最後まで授業の流れを、リハーサルを行いながら確認した。また、授業づくりの工夫は以下の2点である。1点目は時間配分である。今回のプロジェクトでは、児童と留学生の体験的な交流を重視していたため、国に関するプレゼンテーションは1人約5分とし、2人合わせて授業全体の約10分とした。その後それぞれの国のアクティビティをする時間を各15分ずつ設け、全体の30分を交流の時間とした。2点目は、児童と留学生との距離感である。クラスの児童を2つのグループに分け少人数にすることで、一人一人の児童が留学生と関わる機会を持ちやすいようにした。また、留学生が前に立って説明をする講義型の授業ではなく、テーマに沿って

一緒に踊ったり、物作りをしながら文化を体験することによって、児童が留学生に質問をしたり、直接教えてもらったり、といったような児童と留学生の関わりが生まれるような工夫を施した。

最後に授業中の大学院生の役割についてである。まず一人が授業の司会者となり、授業全体の流れを導いた。しかしその際には、授業は留学生が主体で進めていけるよう、必要以上の介入はしないように心がけた。体験活動ではそれぞれのグループに2人ずつ大学院生がサポートに入る。その際には、児童と留学生の関わりを促し、日本と他国の相違点や共通点に気づくことができるような声かけをすることを心がけた。

Ⅳ 授業の具体事例

1. 指導案を中心とした授業内容

本章では具体的な授業内容の紹介として、第2回目のインドネシア人留学生と協働して行った授業を取り上げる。

本時の目標として、①インドネシアと日本との関わりや共通点・相違点に気づく ②インドネシアの遊びや歌に触れ合うことで、異文化を体験しようとしたり、インドネシアに関心を持とうとしたりする ③インドネシア人であっても、人によってさまざまな言語を話し、文化が異なることに気づく ④本時で体験したことや感想を言語により表現する という4点を設定した。

本授業では大きく分けて、2つのテーマから授業を展開した。1つ目は、インドネシアの基本的な知識の紹介である。ここでは、インドネシアについて学ぶことはもちろん、自文化である日本と対比しながら日本との類似点や相違点を認識できるようにした。2つ目が「言葉」をテーマに設定して行ったアクティビティである。ここでは「遊び」や「歌」を通して、インドネシアと日本の関わりや類似点を感じ、体験的に異文化を学んだ。また、外国人である留学生講師と積極的に会話できる環境を整備し、自ら異文化を学びに行く姿勢を育むことができるようにした。

以下に、本授業の具体的な内容と要点、流れをまとめたものを記述する。

内容	時間	要点・注意事項
【自己紹介】 ○母国語と日本語で挨拶 ○名前 ○出身国と出身地方	3分	○名前を言う際、黒板にその国の文字で名前も書く。 ○世界地図を使用し、世界における位置、日本との距離を掴ませる。
【インドネシアの紹介】 ○インドネシアから日本までの飛行機でかかる時間 ○インドネシアに住んでいる人 ○家	10分	○PPTを使用する。 ○写真を多く使用し、イメージが湧きやすいようにする。 ○インドネシアにはさまざまな人種や宗教など多様な価値観を持つ人々が暮らしていることを知らせる。(今回の指導者2人はヒジャブを被っている指導者と被っていない指導者である。視覚的にも、多様な価値観を持つ、インドネシア人と言っても一樣ではないということに気づかせる。) ○昔と今でインドネシアの家の作りが変化したことを知らせる。 ○日本の家との共通点や相違点に気づかせる。

○食事と食事作法	10 分	○前時で行った「食事」の発表・体験との共通点や相違点も意識させる。
○季節		○雨季と乾季の違いを知らせる。
○観光地		○インドネシアの自然や遺跡を知らせる。
【「言葉」についての発表】 ○あいさつ	5 分	○PPT を使用する。 ○インドネシアの基本的な挨拶を体験させる。 ○子どもと大人の挨拶の仕方の違いに気づかせる。
○方言		○インドネシアにおいても、それぞれの地方に方言があり、地域による違いに気づかせる。 ○日本との共通点に気づかせる。
○文字		○児童も知っているアルファベットが使われていることを知らせる。 ○インドネシア語は、英語の読み方とは違う点があることに気づかせる。
【特別活動 1：じゃんけん】 ○インドネシアのじゃんけん ・説明と質問をする。 ・グループごとの王者を決める。 ・それぞれのグループの王者がじゃんけんをして、クラスの王者を決める。	15 分	○2つのグループに分かれて、説明を受けたり、練習したりする。 ○日本のじゃんけんとの共通点や相違点に気づかせる。 ○インドネシアの遊びを体験させる。
【特別活動 2：歌】 ○インドネシアの歌「さよなら」 ・歌の説明と質問 ・練習 ・クラス全員で「さよなら」の歌を合唱する。	12 分	○歌詞カードを配布する。 ○2つのグループに分かれて、説明を受けたり、練習したりする。 ○「さよなら」の歌の音声を流す。 ○「さよなら」の歌がインドネシア語と日本語が混ざった歌であり、そこからインドネシアと日本の繋がりに気づく。
【ワークシート】 ・ワークシートを記述する。		○わかったことや感想を書かせる。

2. 授業づくり・授業中の視点や考え方

本活動の特徴は、大学院生と留学生が協働で授業づくりを行ったことである。この節では、第2回目の授業を例に、授業づくりの過程や、大学院生の役割を示していきたい。本授業では、授業に至るまで、3回のミーティングを行った。まず、1回目のミーティングでは留学生と自己紹介をしあい、今回の授業の概要を説明した。その後、インドネシアについてどんなことを紹介したいか、日本に来てどんなところに驚いたかなどを話し合い、インドネシアと日本の互いの文化について理解を深めた。そうして話を進めるうちに、インドネシアにも日本のようにじゃんけんがあり、グー（石）、チョキ（はさみ）、パー（紙）ではなく、象、蟻、人間であること、さらに指の出し方が異なることが話題として上がった。また、インドネシアには「さよなら」の歌という、日本語が使われている歌があり、その歌は小学校でもよく歌われるポピュラーな歌であることがわかった。そこで、授業のテーマを「言葉」に設定し、インドネシアのじゃんけんや歌を通してインドネシア語に触れることのできる授業にする、というアイデアに至った。

2回目のミーティングでは、留学生が作成した国紹介用のパワーポイントの内容を確認し、付け加えた方がよい内容や日本語の表現などの助言をした。特に、国紹介では、児童がインドネシアに固定したイメージを持つことを避けるために、インドネシア国内には多様な民族がいること、地域によって方言があることなど、同じ国の中にも多様な人々、文化が存在することを児童に伝えるよう、留学生に助言をした。その後、アクティ

ビティの内容を確認し、インドネシアのじゃんけんを紹介するために必要な教材づくりや、「さよなら」の歌の練習、歌詞カードづくりを行った。

3回目のミーティングは授業の直前に行い、一連の流れの確認とリハーサルを行った。時間を測りながら、国紹介を10分、アクティビティを30分で実施できるように調整した。またリハーサルをしながら、留学生にとって日本語の表現が難しいところがあれば、適切な表現を伝えた。このようにして授業に至るまで、留学生と大学院生が連携しあい、協力して授業づくりをした。

そして小学校での授業の際には、大学院生1人が進行役として前に立って授業の流れを導き、もう1人はタイムキーパーを担当した。進行役の学生は、初めと終わりの挨拶や、留学生の紹介、活動中の移動の指示などを行い、留学生の国紹介やアクティビティの際には児童と留学生の直接的な交流を促すために、最小限の介入に留めるように心がけた。アクティビティの際には、2人の留学生は教室の前と後ろに分かれて立ち、児童も半分に分け、前半に教室の前にいた児童は、後半は後ろへ、前半に後ろにいた児童は、後半は前へ交代し、児童全員が2人の留学生と交流できるようにした。またその際には大学院生が1人ずつ留学生につき、じゃんけんのルール説明などのサポートをした。こうして、前半にインドネシアのじゃんけんを、後半にインドネシアの歌をそれぞれの留学生が児童に紹介し、最後には全員で「さよなら」の歌を歌って授業を終えた。

本活動では、児童と2人の留学生との直接的な交流を第一の目的と考え、あくまでも留学生を主体とした授業を目指しつつ、大学院生は細かな授業構成を考え、児童と留学生の交流を深めるためのサポーターとしての役割を心がけた。準備過程から授業当日に至るまで留学生と大学院生が協力して入念に授業づくりに取り組み、大学院生が児童と留学生の間をつなぐ役割を担うことで、より円滑に交流授業を行うことができた。

V 本活動の結果及び成果

本章においては、1年間にわたる本活動の結果及び成果について述べたい。なお活動は1年間で計7回行われたが、各授業の終了時に毎回、図1のような振り返りシートを児童らに配布、記入させた。したがって、本活動における成果はこの振り返りシートの分析結果に基づくものとする。

各回とも、振り返りシートにおいて多く見られた感想は、「各国の文化について新しい発見があった」というものであった。例えば、「タイ人の先生がもち米を手で食べると聞いたときびっくりしました。」(第1回)や、「かんこくの給食では1日1かいキムチを食べている」(第4回)といった感想である。各授業を通して得られた児童らの発見は、彼らが暮らす日本の文化を自明のものではなく、客観視するための大きな学びになったと思われる。

他方で、各回に焦点を当て、特に特徴的な児童らの感想を見られた回は、「インドネシア」(第2回)と「中国」(第5回)である。第2回はインドネシア国籍の留学生2名を講師として招いたが、1人は民族衣装を着用し、もう1人は普段着で授業を行った。講師の服装について、児童の感想の中で、「国籍が同じでも一人一人違う」という趣旨の感想が複数見られた。今回のように外国人講師を招いて行う授業では、その外国人講師の発言がその国の代表的発言として児童に受け取られてしまうことが多い。実際、今回の感想のなかでも、「インド人はいつも民族衣装を着ているのだなあとと思った」(第1回)との感想が見受けられた。このことを踏まえると、第2回で見られたような「国籍が同じでも一人一人違う」という児童らの認識は、彼らにとって非常に大きな学びといえるだろう。

次に中国国籍の留学生を講師として招いた第5回について、児童らの感想の中で、「中国という国に対して元々いいイメージがなかったが、授業を通して中国人と直接かかわった結果、イメージが変わった」という感想が複数みられた。こうした感想について、2点指摘しておきたい。1点目は、授業前は児童らが中国という他国に対して、好ましくないイメージをもっていたということである。これはメディアの影響が大きいと思われるが、この点がデータとして突き付けられ、教員を目指す者にとって非常に大きな問題意識をもつきっかけとなった。2点目は、授業での児童らと中国人の直接のかかわりによって、児童らの中国人に対する負のイメージを変えることができたという点である。本活動は、「子どもたちと留学生の距離感が近い」ということを一つの大きな特徴として掲げて実施したが、これを突き詰めたことによってこうした成果を生み出すことができたと思われる。

以上、振り返りシートの分析結果に基づいて本活動の結果及び成果を述べたが、最後に、授業観察から感じ取ったことを述べてたい。本活動は1年間、7回にわたって実施したが、実施当初はアクティビティを行ったとしても、児童らと留学生の距離感が遠いように感じられた。しかし、回数を重ねるにつれて、その距離は近くなったように感じた。例えば、アクティビティの際、留学生に積極的に質問をする児童の姿がみられたり、また、授業後に個人的に留学生に話しかけようとしたりする児童の姿が多く見られた。この点、例えば、1年間同じ留学生講師が担当したならば、児童らと留学生の間に人間関係が形成された結果、その距離感が近くなることはある意味で当然である。他方で、本活動は、毎回違う顔ぶれの留学生を講師として招いた。すなわち、留学生は、児童らにとっては毎回初対面の相手であったということである。それにもかかわらず、授業の回数を重ねるにつれ、児童らが積極的に留学生にかかわるようになったと感じられたということは、児童らが「国籍の違いによるとまどい」を克服していったといえるのではないだろうか。

VI おわりに

本稿で紹介した国際理解教育の取組は、学校からの要請に基づいて留学生を派遣するのではなく、小学校の教員になることを希望している大学院生が企画を行い、小学校に持ち込むという、これまでとは異なる方法に基づくものであった。果たしてこのような計画に賛同する小学校があるかどうか、そして授業の一環として継続的に実施するという条件を受け入れてもらえるかどうか全く分からない状況で、まずは小学校を探すことから始まった。幸い、日頃から留学生との交流に積極的だった柏原市内の公立小学校の校長先生がこの企画に関心を寄せ、協力してくださることになった。教育実習生の受入など対応すべき案件が山ほどあり、多忙な中、学生の提案に真剣に耳を傾けてくださったことに、あらためて感謝の気持ちを表したい。2017年度以降もこの企画は継続中であり、担任の先生方より「教科書で学ぶだけでなくことがよい」という肯定的な評価をいただいたことを受け、さらに授業の内容を充実させていきたい。

参考文献

- 伊藤ゆかり（2016）「留学生による国際理解教育活動支援の考察—地域の学生と共に学びあう課外活動—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第20号 pp. 25-34
- 大石寧子（2014）「『国際理解教育』を踏まえた小学校と大学の協働—日本語教育の効果的な係わり方の模索例を通して—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.21, No.1 pp. 86-87
- 大阪教育大学留学生指導センター（2003）「平成14年度留学生指導センター活動報告」『留学生教育』第11号 pp. 103-106
- 大阪教育大学留学生センター編（2006）『（財）中島記念国際交流財団助成事業 外国人児童・生徒に対するバイリンガルサポート報告書』
- 加藤巖他（2009）「国際理解教育プログラム『アジアシリーズ』の実践と効果—児童向けアンケートの結果を中心として」和光大学『東西南北』2009 pp. 174-192
- 桐谷正信（2015）「学習指導要領の変遷と国際理解教育」日本国際理解教育学会編著『国際理解教育ハンドブック—グローバル・シティズンシップを育む—』明石書店
- 林原慎他（2010）「小学校国際理解教育における国際交流学習の効果—児童の特性からの検討—」『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』38号 pp. 41-46
- 三浦健治編（1996）『小学校国際理解教育の進め方』教育出版
- 文部科学省（2005）「初等中等教育における国際教育推進検討会報告書～国際社会を生きる人材を育成するために～」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/1400589.htm

参考資料（図1）

国際理解〈第1回〉H. 28. 5. 17
振り返りシート



（ ）組 出席番号（ ）

① 分かったことや気付いたこと

② 今日の感想

③ ほかの国の人に教えてほしいことはありますか？あれば、書いて下さい。

An International Understanding Program for Elementary Students:
Collaborative Approach to Lesson Planning between Pre-Service Teachers and International Students

* HASEGAWA, Yuri, ** KATAYAMA, Motohiro, *** PARK, Sunghee, **** YAMAMOTO, Ayako, and
** YOSHIMITSU, Jun

* Center for Global Education and Research

** Graduate School of Education (Social Studies Education)

*** Graduate School of Education (School Education)

**** Graduate School of Education (English Education)

This paper is a practical report on the activities of an international understanding educational program conducted for two 6th grade classes in an elementary school. The greatest feature of this program is the collaboration between Japanese pre-service teachers and international students to create and conduct lessons which are taught several times throughout the year, instead of a single exchange meeting. The goal of these lessons is to facilitate experiences with various countries' cultures, traditions and customs other than their own, and to develop a global perspective in which the children feel closer to the international world and broaden their perceptions. In each class, the topics such as food, language, music, play, etc. were selected, and international students introduced the culture and customs of their home country. The children experienced various cultures while closely communicating with their visiting international lecturers. As an outcome of recurrent lessons, the children became less puzzled, more familiar, and willing to engage with foreign cultures. It was noted that questions directed to the visiting lecturers increased, and in each class the children continued to make new discoveries about the cultures and customs of their international lecturers.

key words : elementary school, international understanding program, international students,
collaborative approach, lesson planning